

J. M. シング論 (I)

——少年時代の体験と宗教——

徳 永 哲

ジョン (Edmund John Millington) は16歳の時、一切がかわった。彼はバイオリンと文学の研究に熱中するようになり、これまでの自然科学への関心を完全に失ってしまった¹⁾。自然の美しさはそれまでよりも彼を支配していたのだが。夜、彼は真暗なウイクロウの野に出て見回すと谷の底の方から彼をみている二つの巨大な光を発する目を見た。またその目の向うには黒い不吉な顔が盛り上がっていた。彼は自然の神秘的な力に心を引きつけられてしまった。彼はその後数日間、怖れることなくしてその野を昼間さえ通ることができなかつたくらいである²⁾。また16歳の頃彼は非常に気持ちが悪くなった後にキリスト教を放棄した。しかし彼はすぐにはその決意を自白しようとは思わなかった。不信心者と思われることに一種の恥じらいを感じてもいた³⁾。ジョンの母親カスリーン (Kathleen) は、彼がバイオリンに熱中し、また読書や自然の中の散歩にばかり夢中になってしまったことを嘆き、深刻に悩んだ。そして、ジョンが18歳の時、堪りかねたカスリーンは牧師の助けを借りて彼を回心させようとした。しかし、彼は回心するどころではなかった。彼はなんら隠し立てすることなく、信仰を失っていることを認め、信仰がないのに形式的に教会へ通うことは偽善であり、もう沢山だと主張したのである。このことはカスリーンをひどく落胆させてしまった⁴⁾。しかし、ジョンにとってみれば16歳の頃から心に抱いていたことであり、それを打ち開けることに抵抗を感じない程に熟していたにちがいない。ジョンはキリスト教教義については母から解き明かされていたため、よく理解していたのだらうけれども、彼の関心は早くから天然の自然の方へ向いており、10歳になると鳥類などの動物の生態を研究、

観察する博物学に没頭しており、自然科学に浸透された自然観を抱きその中に耽りながら、汎神論を抱くようになっていた⁵⁾。

ジョンの判断、価値一切の基準点はありのままの、人偽や宗教によって造りかえられていない自然に対する感覚、感受性であった。彼にとってありのままの自然には無上の喜びが秘められており、その喜びを感じるのできる人こそ幅広く、力強い思想の持ち主である。そうした人は思い遣りや憐れみの情を胸の奥深いところに仕舞っておける人であり、自然に秘められた喜びを素直に感じようとはせず、偏狭な心を持った聖職者とは正反対の存在であった。聖職者は我を忘れて喜びに陶醉することとは縁がなく、何よりもまず、地獄の肉体的苦痛によってひどく脅かされた存在であったのである⁶⁾。ジョンが聖職者を偏狭な心の持ち主と極めつけるに至ったのは自然に対する卓越した感受性が原因というばかりでなく、厳格なプロテスタントであった母の教育も大きく影響しているように思えるのだ。彼が生まれ育った頃のアイルランドには、プロテスタントとカトリックの二つの対立する教会があり、しかも、その二つの教会は対立する二つの世界、すなわち、僧侶や地主などの特権的階級と貧しい小作農民との二つの世界に深く結びついて、強固な社会的矛盾を形成し、社会問題を一層複雑なものにしていたのである。特にプロテスタントは地主などの特権的階級の結束を強め、少数派ではあるが厳格な福音主義のもとに自己の正義を信じて疑わなかった。ジョンはそうした特権的階級に属する厳格なプロテスタントの家庭で育ったのである。ジョンの母方の祖父トレイル (Robert Traill) はコーク郡シュルのプロテスタント教会の教区主任牧師であった⁷⁾。祖父トレイルの宗教的信念は北部アイルランドの頑強なプロテスタントの雰囲気にはめられていたし、後にプロテスタント協会の福音主義の影響を受けた。北アイルランドはプロテスタントとカトリックの対立が特に激しいところであったが、トレイルはその宗教的風土の影響を受け、過激派に属していたのである。彼は熱狂的になりすぎるあまり、聖職者内部にも煙たがれていたらしく、昇進が思うようにならなかった。それでダブリンから遠く離れた南部の僻地へやられていたようである。コークにおいても、彼はカ

トリックと戦うことを忘れなかった。ジョンは、そうした頑固な牧師の忠実な後継者である娘を母として持っていたのである。ジョンの父 (John Hatch) は法廷弁護士としてかなりの名声を獲得していたが、ジョンが生まれた年 (1871年) の一年後に、天然痘患者を面会したとき感染して死んでしまった⁸⁾。その後、未亡人となった母カスリーンは子供たちを連れてオーウェル・パークへ移り、彼女の母親であるトレイル夫人 (Anne Trail) の隣りに住んだ。そのためにジョンはトレイル牧師の教えを忠実に受け継ぐ二人の女性に宗教教育を受けることになったのである。

ジョンの教育費はゴールウェイに残された土地の地代の他に、オーストラリアで僧侶 (英国国教会牧師) として伝導に生涯を捧げた伯父エドワード (Edward) の遺産によって補われた⁹⁾。したがって、母カスリーンは子供を育てるための労働やまた新たに生活の経済的基盤を確保しなければならないというようなことはなかった。予め確保された豊かな生活条件のなかで、ひたすら亡父の教えにしたがって信仰し、子供を教育したのである。

ジョンが生まれる20年程前の1850年、伯父フランシス (Francis) はグランモア・カールスと呼ばれる大邸宅を買った。それは中世の城を思わせるような豪華な邸宅であるが、19世紀の身分の高いお金持ちが好んで建てた建て方であるらしい。因に、このグランモア・カールスは、勿論、アイルランドにはこうした邸宅が沢山あったが、後に住む人がなく、後年には誇り高き階級の墮落と衰退の象徴の一つとなったということである¹⁰⁾。このグランモア・カールスは1878年にフランシスが病いで死亡するまで、彼のものであった。ジョンの母カスリーンは子供たちを連れてグランモアへ行った。フランシス夫婦は子供たちには非常に寛大であったので、邸内を自由奔放に遊んだり、手をつないでピクニックに行ったり、またグランマルアの高原に口を開いている谷を見に馬車で出かけた。途中、人々が馬をみるために窓から顔を出したり、またすれちがった男たちは帽子に手をやって会釈をし、誰もが道を開けてくれたものだった。ジョンの兄二人 (Robert と Samuel) は母がいなくてもグランモアにいたことができた。しかしジョンは幼なすぎて仲間に入ることができなかったようであ

る。¹¹⁾。

ところが夢のような場所もフランシスが病いで倒れると邸内の雰囲気は一変した。フランシスの夫人エディサ (Editha) はフランシスを彼の部屋に寝かせたまま、部屋の内へは誰も入れようとはしなかった。エディサは夫を医者にも看せず、英国から送られて来るハガキで受けた指示に従って同種療法の投薬を施し、ひたすら夫の脇で回復を願って祈った。しかし、その甲斐なく、フランシスは死んだ。その時ジョンは7歳であった。エディサは深い悲しみに沈んでしまった¹²⁾。彼は悲しみを忘れるために住居を変え、再婚した。それ以後、グランモア・カースルは他人の手に渡ってしまった。ここでのジョンの幼児期の体験は、彼が少年時代にオーウェル・パークやグレイストンズ、さらにはウィックロウの自然の中での体験へ通じる一つの線の先端にあるということができる。

カスリーンは夏には家族を連れて、田舎の方へ避暑に出かけることにした。彼女は人気のある避暑地は好まず、人気のない静かな場所を選んだ。それはウィックロウとダブリンのほぼ中間にあたる海辺の町グレイストンズであった。グレイストンズは、異邦人に会おうことを嫌い、またプロテスタント以外の者とは交際をすることを避けたいと思っていたカスリーンにとって最適の場所であったようだ。彼女はその地域の美しさを愛していたし、山の近くにいることを心から喜んだ。また彼女は思い出のグランモアへ訪れることのできる所にいることがこの上なくうれしかったのである。グレイストンズへは1874年から彼女の姉アンヌが死んだ1882年を除いて、16年間通いつづけた。それはジョンが4歳の時から21歳になるまで続いた。グレイストンズへの毎年の引っ越しはジョンの生活の日常の一部となった。この規則正しさそのものがジョンの成長の重要な条件の一つとなったのである¹³⁾。

グレイストンズはカスリーンの宗教的感覚に適した町であったようだ。カスリーン一家がオーウェル・パークで接触している人々は社会的に地位が高く、特権的な生活を送っているのがほとんどであった。その人々は多分プロテスタントであっただろう。カスリーン一家がグレイストンズへ避

暑に出かけてもそうした環境はまったくかわらなかつた。そのために、ジョンはそうした環境の中に閉じ込められたような状態で、自然を友として育つた。その小さな世界の外の世界、すなわち、自然を休暇の遊び場とするのでなく、自然を糧とする世界とはほとんど接触することもなく育つたのである。ジョンは母の外界からの防衛が完璧に近いなかで教育された。したがって、彼の精神は科学書を読むにふさわしい年齢になるまで、真剣な闘争から解放された。彼は生活の特権的意識を疑うことはなかつたし、教義によって捏造された世界をあたかも真実の世界であるかのように思つたのである¹⁴⁾。

母カスリーン¹⁵⁾の宗教的信念は極めて強固なものであり、しかも彼女の教義は緻密に構成された一つの大系を形づくっていた。天地創造、エデンの園からの人間の墮落、イエスの死による罪の償い、そして人間の救済と楽園の回復が一つの宇宙のように語られた。したがって、少年時代、その緻密な説明のためにジョンは母の教えを疑つたことがなかつたのである。母は宗教的秩序と同じように厳格に家庭を指揮し、しかも、母は非常によく教えに精通していたので、その教えに執着し、聖書の權威を引用することによって自己の教義をささえたのである¹⁵⁾。ジョンは彼女の教えに浸透されていた。

ジョンは幼ない時、母に教え込まれていた地獄の觀念にひどく悩まされたことがあつた。ある晩彼は地獄の觀念に恐ろしい程圧迫されて、自分が地獄へ落ちてどうにも取り返しがつかないと思ひ込み、永遠の苦しみを思い浮べては泣き通したことがあつた。翌朝、再び寢床の中で泣いている彼を母が見て、罪を改悛させた聖靈によってその涙が流されているのだと言つて慰めたのである¹⁶⁾。

母カスリーンと祖母アンヌとは宗教的教義によって堅く結ばれていたらしく、二人とも一般民衆を避け、社会的に、たとへ民衆から分離された状態におかれることがあろうとも、二人はその少数派に属しているということのために苦しむというようなことはなかつた。二人はイエス・キリストの救済を受け容れた者は皆聖書の共同体の中にあることを堅く信じてい

た¹⁷⁾。しかも、二人はシンボルとしてキリストの再臨を考えていたのではなく、真実キリストが再臨し、最後の審判の後に新天新地が訪れることを信じていたのである。したがって、今は解き放たれた悪魔たちが支配する世の中であって、その世界を自分たちがどうしようとしても無駄であると思っていたのである¹⁸⁾。勿論、世の中を改善しようという気はまったくなかった。しかし、幸いにしてジョンは自己の自然科学への関心を母から奪い去られることはなかった。母はキリストの再来を堅く信じ、信仰の教えを解きはしていたが、自然科学や社会科学など科学への子供の関心を奪い去ることはなかったのである。ジョンは厳しい宗教教育を受けながらも、自然の中へ自己を埋没させる自由が保障されていたために教義や信仰からは解放されていたのである。1882年に伯母アンスが死んだが、ジョンはまったく悲しんでいる様子を母に見せなかった。母に愛する者を失って悲しくはないのかと咎められたが、ジョンはフローレンス・ロス (Florence Ross) という同じ歳の従姉妹と仲良くなって遊びまわっていて、有頂天になっていたこともあるであろうが、年齢的に見ても、人が死ぬとどうして悲しいのか、また悲しむことの意味がまだわからなかったはずである¹⁹⁾。

ジョンは10歳の時、彼の「小さな友」フローレンスと共に森へ出かけてはやぶの中に隠れて野鳥の極ささいな動きも見逃すまいと観察したのだった。彼が博物学に熱中していることを知った人が彼に本をくれた。これに熱狂的に喜んだ二人は特に鳥類学の本を読んで生態を調べたりしたのである。この鳥類の観察の研究は長年にわたって続けられ、1884年頃には詳細にノートするばかりでなく、ノートに記述された記録が一つの表現として読めるほどになったということである。彼は感動を表現する様式を確立させつつあったのである。鳥を表現したものでは『谷の影』の「放浪者」の最後の長い台詞が最高であろう。屋内を嫌って戸外に自由と解放を見出し、鳥類を観察しながらその中に陶醉没頭する。このジョンの生き方は「放浪者」の生き方であるように思える。

おかみさん、私と一緒にいれば、あなたは死ぬようなことはありません

んよ。食べていく道はいくらでも知っていますから。さあ、行きましよう。寒かったりして、また再び日が照って、谷間に南風が吹き抜けて行くとき、あなたはここにじっと座って一日一日が過ぎて行くのを毎日ぼんやり眺めながら老け込んでしまったではありませんが、これからはそんなふうには湿った土手に腰かけていることはありませんよ。……さあ、行きましよう。私のおしゃべりばかりきかなくともよいのです。暗い湖の上を鳴きながら渡っていくあおさぎの声をきくでありますし、らいちょうやふくろうの鳴き声をきくであります。また温かい日にはひばりや大つぐみの声もきけるであります。そうした鳥の声をきいえるとペギー・カバナー (Peggy Cavanagh) のように年老いて髪の手が抜けたり、視力が衰える話をきくこともありますまいし、日が昇ればすばらしい鳥のさえずりをきくであります。あなたの目の近くで、老人の病んだ羊のようにあえいでげいげいいうのをきくことはありますまい。

(You'll not be getting your death with myself, lady of the house, and I knowing all the ways a man can put food in his mouth...We'll be going now, I'm telling you, and the time you'll be feeling the cold and the frost, and the great rain, and the sun again, and the south wind blowing in the glens, you'll not be sitting up on a wet ditch the way you're after sitting in this place, making yourself old with looking on each day and it passing you by.

Come along with me now, lady of the house, and it's not my blather you'll be hearing only, but you'll be hearing the herons crying out over the black lakes, and you'll be hearing the grouse, and the owls with them, and the larks and the big thrushes when days are warm, and it's not from the like of them you'll be hearing a talk of getting old like Peggy Cavanagh, and losing the hair off you, and the light of your eyes, but it's fine songs you'll be hearing when the sun goes up, and there'll be no old fellow wheezing the like of a sick sheep close to your ear. 21)

この放浪者の台詞は自然（高原地帯）の実際の生活とは到底結びつかない。それは都会人が自然に対して抱くロマンスであり、詩的な憧れであろう。ノラは放浪者と行動を共にすることによって、自然に対してまったく違った見方をする世界を知るのである。自然美の中にひたすら陶醉して生きること、それは詩人の生き方であると考えられる。この詩人はまた子供時代のジョンの姿が投影されているように思える。

ジョンはフローレンスと共に無頓着にそして時には楽しくあけすけに性問題について語り合った。しかし、二人はキリスト教の教えのことについてはまったく語り合わなかった。勿論二人はキリスト教の教えには精通していたであろうが、ジョンにとって一神教の教義は少年の心にはなじめないものであったらしい²²⁾。ジョンはこの頃もうすでに汎神論を心に抱いていたようである。この汎神論的世界観の確立が次第に彼と母あるいは家族との関係を困難なものにしていったのである。ジョンはフローレンスが好きであった。子供ながらに将来は結婚するつもりでいたらしい²³⁾。しかし、翌年の夏、彼女はどこかに別の男友達をつくってしまい、ジョンは振られてしまった。彼は激しい衝撃を受け、ぼう然としてしまった。そして一人遣る方なくいらだっていた。母はそんなジョンの心を察して、時たま彼の幼友達と一緒に連れだって彼を散歩にさそったりした。一年後再びフローレンスの愛が戻って来た。再び二人は腕を組んで森の中を歩きまわった。しかし、一度別れたことの後遺症が強く残っていて、以前のようにあけすけに語り合ったり、お互いに手やその他、体の一部を触れ合うということができなくなっていた。ジョンはわだかまっている思いを率直に言うことができず、フローレンスの坐っていた椅子や彼女が貸してくれたノートに口付けをしていたのである²⁴⁾。そのうち、再びフローレンスには気変わりが生じ、ジョンは捨てられてしまう。ジョンは生来、体が弱かったのだが、再度激しい衝激を受けたせいか、いつしか遺伝説を耳にするようになって、知らずに、健康でない親は健康でない子供を生むと思ひ込むようになっていた。そして、自分が結婚したならば必ず不健康な子を持つだろうと憶測した。さらに、今自分が苦しんでいるように子供を苦しませるようなこと

になるならば、もう結婚などはするまいと考えたのである。その考えはジョンの心を非常に惨めにしたらしい。ジョンがダーウィン (Darwin) の本を手に入れたのは14歳の時であった²⁵⁾。ダーウィンの進化論は彼に新しい事実と力を与えてくれたのである。彼が本を開くと、進化によってでなくして、鳥の足先と人間の手の類似性をどう説明できるのか、ということが書かれている頁があった。彼はかたわらに本を放り投げ、戸外へ飛び出して行った。田舎の夏ではあったが、空は青く思えず、草も緑には見えなかった。彼は横たわると疑問が次ぎ次ぎにわいて来てのたうったのである。彼はそれまで疑問を持ったことがなかった。賢い人間は疑問を持たないと思っていたし、またそう思うように教育されていたのである。彼が失恋と不健康のために自らを責めさいなみ、絶望的な心境にあった時に、彼に生きる力を与えてくれたのは、進化論がそうであったように、外ならぬ自然科学であったのである。

1880年代のアイランドは全体が大きく揺れ動いていた。小作農民が団結して権利を主張するようになり、小作人と地主との争いが表面化していたのである。その発端は小作人出身の革命家デヴィット (Davitt) が1879年に「土地同盟」を設立したことにある。さらにその同盟には地主階級出身のパーネル (Parnell) が加わって、彼の指導のもと、アイランドの小作人たちは地主に戦いを挑むようになった。彼らは「わが隣人が不当なる地代の不払のゆえをもって追いたてられた農場に値をつけたり、それをうけとったり、保有したりは決してしないこと、さらにそこに作物を播種したり、あるいは貯えたりすることに決して手を貸したり、活動したり、関係したりはしないこと、そしてそうしようとする者を公衆の敵として捕えること²⁶⁾。」という誓約でもって団結し、ボイコットという手段で地主や政府に対して抵抗したのである。それに対して、地主は地代を払おうとしない小作人の追いたてを敵しく行っていた。多数の警官に守られて、無防備の小作人の家族を無理矢理家から追い出し、追いたてたのである。スケルトン著『J.M. シングと彼の世界』(Robin Skelton: J.M. Synge and His World) の中に追いたての風景が写真で三枚収められている。最初の写真

は農道に沿って銃を持った大勢の警官が並び、道の真中あたりに、城壁破壊用の旧式な武器である大きな丸太が数本積まれた大きな荷車と追いたてられた小作人が荷物を運んでいるのであろうか、小さな荷車が置かれている。無防備な小作人の家を一軒壊すためにしてはものものしい警戒ぶりである。また、その下の写真では三本の大きな丸太で組まれた三脚の頂点から鎖でつるされた一本の大きな丸太が家の方へ、その先端を向けている。そしてすでに外の壁の三分の一近くが完全に破壊されている。さらにこの写真の右端にはハットをかぶった、腹の突き出た紳士風の男がなにやら考えているような様子で立っている。さらにまた、次の頁の写真には、まだ破壊されていない家があって、庭には家財道具などがまるで屑のように投げ捨てられている。その前に寄りかかるように、汚れた上着を着た少年が両手をポケットに突込んで、素足で立っている。その奥の家寄りにはよれよれのコートを着た父親らしき人が両腕を腕組みし、遠くを黙ってみつめている。さらに玄関口には警官が二人銃を持って立っている。少年と父親らしき男は何を考えて前方をみつめているのであろうか。二人は何の抵抗もできないまま黙々と追いたてられ、乞食か浮浪者になるのであろうか。『西国の人気男』(The Playboy of the Western World)』のクリスティ(Christy)の台詞が思い浮ぶ。

じゃあ、おれは責苦の中へ戻って行かねばならんのか。それとも逃げ出して、8月のほこりで喉もとに泥の汚れをつまらせたり、3月の風に吹かれて、ほんとうに肋骨が胸の中で笛を吹いているのではないだろうかと感じたりしながら、あちこちの国の浮浪者となってさ迷い歩かねばならんのか。

(And I must go back unto my torment is it, or run off like a vagabond straying through the Unions with the dusts of August making mudstains in the gullet of my throat, or the winds of March blowing on me till I'd take an oath I felt them making whistles of my ribs within?)²⁷⁾

グラッドストーン (Gladstone) は「弾圧法」を採択した。この法律によって、治安妨害の疑いがかけられた者は誰でも即座に逮捕され、何ヵ月間か投獄されるようになった。そのため、「土地同盟」のほとんどの指導者たちが投獄され、パネルも投獄されたのである。しかし、反対世論の沸騰は続き、アイルランドの田舎の地方でも政治的混乱の恐怖に包み込まれたということである。1881年に「土地法」ができ、地主の権力は、「小作権の安定、適正な地代、小作権売買の自由を原則的に認め、土地裁判所を設置して地代の安定と地主・小作人間の紛争の解決をはかった」²⁸⁾点において譲歩された。しかし、この「土地法」はA. L. モートンによると次のような性格と目的を有していた。

1881年の「土地法」は、巧みに計算された「土地同盟」への打撃であった。それは、裁判所を設立して15年間地代を据置いたのであり、そのあいだ、借地人は追いたてられることはなかった。この法律の目的は、土地戦争で破滅におびやかされていた地主を破滅から救うことであり、同盟の運動基盤を切り取ることであった。この点で、それは大きな成功をみた。というのは、農民たちが、追いたてを逃れる望みならどんな望みでもすがろうとしていたからである²⁹⁾。

以上の引用から当時地主が土地戦争で破滅することをいかに恐れていたかということがわかる。それと同時に、小作農民のうけた追いたての恐怖がいかに切羽詰ったものであったかということも理解できる。小作人の追いたては即座に当人とその家族の死活問題と結びつく。小作人が土地を追われることはそのまま死を意味する。『谷の影』には、残酷な追いたてを暗示するような台詞がある。

ペギー・カバナを見てごらんよ。以前はやっかいな、牛の乳しぼりを手際よくやっていたし、パンをかえす手際がとてもよかった。それがいまじゃどうだね、歯は抜けっっちゃうし、頭はとぼけるし、頭の毛といやあ、山

を焼き払ったあとの草ほどもはえてないで、通りをほっつきまわったり、古いぼろ家にすわり込んだりしてるよ。

(To look on Peggy Cavanagh, who had the lightest hand at milking a cow that wouldn't be easy, or turning a cake, and there she is now walking round on the roads, or sitting in a dirty old house, with no teeth in her mouth, and no sense, and no more hair than you'd see on a bit of a hill and they after burning the furze from it.)³⁰⁾

ジョンは小作人の権利と小作人を追いたてることの不正を母と論じあったことがあった。その時、母は小作人が借地代を払わなくなれば自分たちはどうなるのかという意見を述べた。それに対して、ジョンは適当な返答をみつけることができなかった。兄のエドワード (Edward) は地所差配人を仕事としていたのであるが、母の言うなりになって、小作人の追いたてを実行した。エドワードは非常に巧妙な手口で小作人を追いたてた。特に、ウィックロウの小作人ヒュー・カレイ (Hugh Carey) を追いたてた手口は絶妙であった。その手口はアイルランド国全体に起っていた追いたてのまさに代表的手口であるといわれたほどである。その手口とは、土地と無縁の渡り労務者を雇い、小作人を家から追い出した後に、すぐに労務者を送り込み、追いたてられた小作人が隣人たちの力を借りて権利回復をしようと企てる隙を与えない。そして、それからその家は取り壊さないだけの値打ちがあるかどうかを調べ、いずれの見込みもたたなければ、燃やしてしまうというものであった。この追いたてられたヒュー・カレイは二人の姉妹を養っていた。そのうちの一人は痴呆であった。エドワードは世論を省みることなく、いつもの手口で小作人と彼の姉妹を警官などが見守る中で追いたて、そして数日後に家を燃してしまったのである³¹⁾。

このエドワードの冷酷な行爲は、母カスリーンによると、彼の属している階級の利益ばかりでなく、道徳的正義にもとずいてなされたのであったのである。

エドワードが追いたてを行つたカレイの家はウィックロウ郡グランモアにあった。彼はグランモアの伯母の地所から追いたてたのである。1887年の夏のことであった。ジョンが16歳の多感な時に、エドワードが職分に取り組んだ残酷さと効率の良さはジョンに忘れることのできない出来事となつたのである³²⁾。

ジョンがキリスト教を放棄したこと、それは、偏狭な故に、寛大さを欠く心に対する断固たる抵抗に他ならなかつたのである。そしてまた母の教えを疑うことを知らなかつた自己の子供時代との完全な決別でもあつたのである。

注

1. J.M. Synge: *Collected Works* (Oxford University Press) Vol. II, *Autobiography* p. 9.
2. 同上。p.10.
3. 同上。p.11.
4. Robin Skelton: *J.M. Synge and His World* (Thames and Hudson, London) p.24.
5. 前掲書。 *Autobiography*, p.7.
6. 同上。p.6.
7. Green and Stephens: *J.M. Synge 1871-1909* (Macmillan) p.4.
8. 同上。p.5.
9. Stephens: *My Uncle John* (Oxford University Press) p.22.
10. 前掲書。 *J.M. Synge 1871-1909*, p.3.
11. 前掲書。 *My Uncle John*, pp. 22-24.
12. 同上。p.24.
13. 同上。p.25.
14. 同上。p.26.
15. 同上。p.36.
16. 前掲書。 *Autobiography*, p.6.
17. 前掲書。 *My Uncle John*, p.28.
18. 同上。p.28.
19. 前掲書。 *Autobiography*, p.7
20. 前掲書。 *My Uncle John*, p.32.
21. *Collected Works* (Oxford University Press, 1966) Vol. III, p.57.
22. 前掲書。 *Autobiography*, p.7.
23. 同上。p.8.
24. 同上。p.9.
25. 同上。p.10.
26. A. L. モートン 『イングランド人民の歴史』(鈴木亮・荒川邦彦、浜林正夫訳)

- 未来社 p. 380.
27. New Mermaids 'The Playboy of the Western World' pp. 76-77.
 28. 前掲書。『イングランド人民の歴史』 p.380.
 29. 同上。 p. 381.
 30. 前掲書。 *Collected Works* Vol. III, p. 51.
 31. 前掲書。 *J.M. Synge 1871-1909*, p.13.
 32. 同上。 p. 13.